

# ラフカディオ・ハーンと日本の近代 日本人の〈心〉をみつめて

牧野陽子 著

## 民話受容した著述家たちの系譜



新曜社・3600円

まきの・ようこ 53  
年生まれ。比較文学  
者。成城大名誉教授

『時』をつなぐ言葉 ラフカディオ・ハーンの再話文学』で角川源義賞ほかを受賞した第一人者による小泉八雲論の集成である。19世紀末の日本に40歳を過ぎて到来した世界放浪者ハーンは、出雲の国・松江で帰化し、小泉八雲となって『怪談』に至る多くの英文著作をなし

た。100年以上前の日本の姿と人々の心を描いた英語圏作家を、今になってあらためて再訪する意義はどこにあるのか。そうした疑問を抱く読者に、本書は思わぬ光景を展開して見せる。従来の文学研究の相場であった作家論・作品論を超え、同時代の幾多の著述家のなかに

ハーンを位置づけ、その発想の源泉にさかのぼる一方で、口碑・伝承とハーンの創作との相互関係に分け入り、さらにはその著作の感化をうけた後世の作家たちとの共鳴に及ぶ。

例えば第4章「棚田の風景」前半には『紅はこべ』他で知られる女流作家パロネス・オルツィの『ハンガリー民話集』が登場する。その挿絵には、説明もないままに、なぜか日本の子供や娘たちをあしらった挿絵が施されている。この民話集には「蛭姫の求婚者」も収められるが、奥のところ、これは福井に滞在した宣教師A・グリフィス

の『日本民話集』から発想を得た作品だった。

さらにこの一話は他ならぬグリフィス自身による創作だったことも、解き明かされる。同じように蛭に惹かれたハーンが霊の怪異に傾いたなら、グリフィスは田園の蛭狩りの風物から、読者を巧みにファンタジーへと引き込んでゆく。枠組みは「難題求婚譚」の類型に収まるが、オルツィはグリフィスの描いた幸福な大団円をあえて削除してしまう。『まぐわび』同様、幼少を海外で過ごした著者の日本発見が、伝承や民俗の再話の杜のなかに隠された謎に感応する魂の響き合いを解き明かす。そのしなやかな筆遣いの裏には、著者の強靱な意思と博搜をいとわぬ探求が透視される。